



空知医師会の現況

空知医師会 副会長
小林産婦人科医院 院長
小林 公民

当医師会の会員数は115名という大医師会ですが、その内7割が砂川市立病院の勤務医です。ご存知のようにその市立病院が平成22年10月28日、新本館を開院しました。人口2万弱の町にはそぐわないほどの大病院です。見学会には2日で5,000人も市民が集まり、期待の高さをうかがわせました。これからさらに中空知の基幹病院として責任を全うすることでしょう。カルテ、受付等全部コンピュータ化され、最初は皆不慣れなため、ずいぶん待たされた等と不評だったらしいですが、スムーズに回ればやはり便利みたいで、私みたいアナログ人間は、もうここでは勤務できそうにもありません。今では開院の8時には玄関に患者さんの列ができています。

それにしても莫大な借金はどうするか、OBの一人として気になるところです。全職員、特に事務方は病院が大きくなって、何となく親方日の丸の気分になるのではなく、もっともっとコスト意識に目覚めてサービスに努めるべきだと思うのですが、今働いている先生方は結構忙しく、病院の収入も増えているみたいでほとんど心配していないようです。もちろん現在働いている人にもみ返還の義務があるとはゆめゆめ言いませんが。

東日本大震災の支援として、個人的にはいろいろ対処していますが、空知医師会としての義援金は無論別に予定しています。しかし開業医では人を派遣することは無理ですが、市立病院からは何人か出かけています。往復、フェリーを利用して飲料水のボトルを買い占め、3食も確保してマイカーで出かけるのとことですが、宿泊だけは面倒みてくれるとのことですが、まさかタダで当直させる魂胆とは思いませんが。

砂川市立病院には東北出身の医師も多く、行方不明の友人がいて、あまりの悲惨さにみんな心痛めていました。

今回の震災は津波と放射能の両面から見る必要があります。確かに今のところ放射能による死者はいませんが、間接的心理的影響は莫大です。復興の大きな妨げとなっています。現在、電力の3割を占めている原発を、それによって享受している便利な生活を捨ててすっぱり止めてしまうのか、原発は危険極まりないものと認識しつつ、想像力を十分働かせ、

幾重にも安全装置を確保して継続していくか難しいところですが、今回の想定外と言いつつしている事故も、本当は危険極まりない原発を絶対安全と言ってきた愚かな自信と思い込みが、いつの間にか安全神話として定着し、実際は起こりうる大危険時の対応を想像できなかった、あえてしなかったことに問題があったと思います。

現在人類が必要としているエネルギーの大部分を占めている化石燃料も、過去の太陽エネルギーの極々一部の蓄積にすぎません。いずれ太陽などの自然エネルギーで全部賄えることのできる未来を信じています。

空知医師会は115名の内81名が砂川市立病院の勤務医という少し変わった医師会ですが、かつて開業医も市立病院のOBか縁の深い先生方が多かったせいもあり、両者の関係は大変良好で、この人口で基幹病院へと発展できた一因でもあります。もちろん現在も病診連携、認知症もの忘れ外来の連携医療機関等として交流は良好ですが、いささか開業医の力が不足でもう少し仲間を増やしたいのですが、勤務している方がそれなりに高給で勉強もでき安定もしているのでしょうか。従って危機的医療、医療体制の崩壊の報道もぜひいたくな言い方をすれば少なくとも砂川では無縁でして、夜間でも砂川市立の緊急外来に飛び込めばいつでも診てくれる、子供の場合、小児科の専門医でないと満足しない、恵まれた医療環境に慣れすぎた患者もいて、市民への啓発教育が必要とされています。

開業医の方も有床診療所が普通だったのですが、今は全部無床で精神科の1病院のみベッドを持っています。休日当番医以外の時間外深夜診療は全部市立病院におんぶに抱っこの状態です。それにほとんど開院20年以上ですので、一見経済的に逼迫している様子は無さそうです。それにしても開業医の減少、高齢化が進んでいますが、今年初めて耳鼻咽喉科の先生がビル開業しました。市立病院の新築を見越して建てられた複合賃貸マンションの2階医療ゾーンですが、中空知としては初のビル開業の成功を祈っています。空知地区は交通のアクセスも良く、地価も安く大変住みやすいのに、人口の減少、景気の低迷に苦しんでいます。特に砂川市は安心して暮らせる医療福祉の町としてしか生き残れません。市立病院を中心として各医療・福祉施設を充実させ、皆で支えあっていきたいと思っています。

空知医師会の歩みは年1回発行の「空医だより」にまとめています。故新川輝朝会長を初代編集長として47号となりました。皆さんの記念の一齣になればと思っています。